

第 1 回 横須賀港浅海域保全・再生研究会 議事録

1. 日時：平成 24 年 7 月 23 日（月）午後 2 時～ 4 時
2. 場所：横須賀市役所 本館 3 号館 301 会議室
3. 議題：横須賀港における浅海域の保全・再生について
4. 出席者

(1) 委員：10 名

	所 属	役 職	氏 名
委員長	日本大学理工学部海洋建築工学科	教授	近藤 健雄
副委員長	国土交通省国土技術政策総合研究所沿岸海洋・防災研究部	沿岸海洋新技術研究官	古川 恵太
委員	神奈川県水産技術センター企画経営部	主任研究員	秋元 清治
委員	よこすか海の市民会議	代表	今井 利為
委員	国土交通省関東地方整備局京浜港湾事務所	所長	角 浩美
委員	横須賀市東部漁業協同組合	代表理事組合長	斎藤 浩昌
委員	国立環境研究所環境リスク研究センター生態系影響評価研究室	室長	堀口 敏宏
委員	国土交通省関東地方整備局港湾空港部港湾計画課	課長	森 弘継
委員	横須賀市環境政策部	部長	本多 和彦
委員	横須賀市港湾部	部長	藤田 裕行

(2) 事務局等：7 名

	所 属	役 職	氏 名
事務局	横須賀市港湾部港湾企画課	課長	松尾 和浩
	横須賀市港湾部港湾企画課	係長	服部 順一
	横須賀市港湾部港湾企画課	担当	牧野 弘幸
関係職員	横須賀市港湾部港湾総務課	課長	関根 謙二
	横須賀市港湾部港湾建設課	課長	鈴木 栄一郎
	横須賀市環境政策部環境企画課	課長	小澤 充
	横須賀市環境政策部環境企画課	主査	茂木 直也

5. 傍聴者：2 名

6. 内容

会議の内容については、以下のとおり

(1) 開会

(2) 辞令交付（副市長挨拶）

- ・ 廣川副市長から辞令交付と挨拶

(3) 委員及び事務局紹介

- ・ 委員及び事務局、関係職員の紹介
- ・ 配付資料の確認
- ・ 定足数の報告

(4) 委員長及び副委員長の指名について

- ・ 市長の指名により委員長に近藤委員、副委員長に古川委員が就任した旨を報告し、了承を得た

(5) 議事

議題① 傍聴及び議事録の取扱いについて

- ・ 事務局から資料をもとに傍聴及び議事録の取り扱いについて説明し、了承を得た
- ・ なお、傍聴者のパソコン使用については、配慮をするよう委員からの意見があった

議題②「横須賀港における浅海域の保全・再生」について

- ・事務局から資料をもとに横須賀港における浅海域の保全・再生について説明し、各委員から自由に意見等をいただいた

《各委員からの意見や質疑応答》

【近藤委員長】

委員の皆さま方から、順番に、どんなご意見やご質問でも結構なので、例えば、この研究会で何を今後ディスカッションしたらよいか、また、その際にどういう資料があったら大変望ましいか、あるいは、横須賀港全域を北から南まで視察をしようとか、あるいは、国総研等に既にあるいろいろな環境情報を勉強会として各委員にお示しいただくなどもあり得ると思います。

秋元委員から恐縮ですが、何かご意見やご希望でも結構なので、お話いただきたい。

【秋元委員】

候補地を今後考えていく際には、それぞれ沿岸の海域の状況を理解する必要があると思うが、そのための資料をどの程度市で持っているのか。また、どのように集めようと考えているのか、お聞きしたい。

【事務局（港湾企画課 松尾課長）】

事務局で、ある程度の資料はそろえることができると思う。逆に皆さまから、これからの研究・検討のために、こうした資料をそろえてほしいというものがあればお伺いしたい。

私どもが持っていない資料を皆さんがお持ちになっていることもあると思うので、私どもで既に持っている資料、候補地を決めるにあたって必要な資料、今後必要となる資料についてのご意見、また、こうした資料があるので使えないかというご意見もいただければ、大変ありがたい。

【秋元委員】

どのような資料があるのかという一覧表を作るところから始まってよい。昭和30年代の海の環境を取り戻すことを理想としたいという話もあったが、そこまで古く遡ったデータは非常に難しく、例えば、今日の配付資料にある海底の底質の状況などは環境特性を反映しているので、データがあれば非常によいが、こういったものはほとんど無いと思われる。

どこまでデータを持ち寄ることができるのかというところから議論する必要があると思っている。

【事務局（港湾企画課 松尾課長）】

港湾部と環境政策部で、これまでのアセス関係の資料があるので整理をさせていただく。次回にお示しできるように、どのような資料があり、どのような資料がないか、また、皆さまのお持ちの資料があれば、教えていただきながら、資料を整理させていただきたい。

【近藤委員長】

おそらく市に過去のデータがいろいろあると思うので、まずそれを示していただいたうえで、専門

の立場からこういう資料もあるのではないかとご指導いただきたい。

【今井委員】

浅海域の保全・再生となると漁業権との関連がどうしても出てきてしまう。共同漁業権や区画漁業権はどここの場所を選定しても、横須賀の港湾区域では問題となってくると思う。そういう点で、共同漁業権区域と区画漁業権の場所を認識しておく必要があると言える。

個人的には、従来の埋め立てとは違って、市民と漁業者が海域を広く利用するという点では、今までの20世紀の事業の考え方を一度考え直していただいて、漁業者も浅海域を保全することで水産資源の再生が図れ、なおかつ、市民もパブリックアクセスで海に触れて泳げるなど、共生を目指すような場所の選定、工法、活用の方法をこの会議で整理していけたらよいのではないかなと思う。

【近藤委員長】

漁業権についての資料を入手して、地図上でオーバーレイしていただきたい。

【角委員】

資料を拝見すると、北から南までをゾーン分けしてあり、北の方はだいたい米軍施設などがあり、ハード的なもの、岸壁などで埋め尽くされている感じがする。

活生のエリアの馬堀海岸は時化の時に波が入ってくるとのことで、国で整備を行った。その横には走水地区があり、こちらは侵食傾向にあるとのことで、話を聞くと北風が原因ということだが、以前は砂浜が長く幅広くあったと聞いている。北風は以前からも吹いていると思うが、馬堀海岸を整備したことが影響しているのか、左側にある漁港が影響しているのかなど、分析はされているのか。

あるいは、南の共生のエリアでは、以前は藻場などが沢山あったのかなど、そういった資料やデータがあると、これを考えていくうえで貴重なものとなると思うので、分かればお願いしたい。

【近藤委員長】

やはり、最初はデータがいろいろと必要ようである。各委員がいろいろな問題点を指摘するうえでもデータがベースとなるので、藻場や砂の移動データなど、市が捉えているものがあれば出していただきたい。

【斎藤委員】

横須賀支所のある港のすぐ裏は、海釣り公園なので釣りはできるのだが、うみかぜ公園などは釣りが禁止ではないのかもしれないが、日曜などは釣りをする人数が多く、釣り竿がたくさん出ているため、タコツボを入れても手繰れず、漁業権があっても漁ができないような状況である。市民のふれあいの場があることはよいことで、常識的なレジャーであればよいが、今のルアーは50メートル位飛ぶので、竿をそれだけ投げられると漁ができない。護岸の際で冬場はナマコなどの漁をやっているが、土日は近寄れない状況である。

東部漁業協同組合が漁を行う沿岸では、猿島の周辺が海水浴場となっているが、横須賀支所の港

から見て猿島の海水浴場の右側にある「オオアド（オウド）」という場所にはアマモがあり岩場がある。そこは、人が入れない状況なのでアマモがあると思うが、そこに人が入れるようになるとアマモもなくなるのではないか。アサリも砂が移動して今年は取れない状況である。

市民が海と触れ合える場所と言え、走水の海水浴場と浦賀久比里の燈明堂の辺りといったところではないか。

米軍区域で50ヤードまでしか近づけないところで漁をやっているが、ヴェルニー公園の空母が入っている辺りは、操業できない状態である。

候補地がどうなるか分からないが、協力できることはしていきたい。ただし、漁業者が不利益になることには協力できかねると思う。

【古川委員】

計画を拝見して、議論の方向性や狙いは大いに賛同できる。その中で3点ほど、注意と要望、情報提供をさせていただきたい。

1つは、何かをしようとしたときに、総論ではよいことだが、具体的にある場所であることをしようと思うと、得をする人と得をしない人が出てきてしまうと思っている。検討内容で利活用の検討と書いてあるが、利活用の検討と整備場所の検討を分けずに、ここだったらこういうことができるというように、走水はという具体的な話も出てきたが、場所と利活用の検討を分けずに絞り込んでいく考えをとっていただきたい。そういうことを考えると、できるだけ順応的に管理をするとか、PDCA サイクルといったような、少しずつやってみては本当にそれでよいのかを確認しながら物事を進めることが重要なのではないかと思う。

2番目の意見であるが、スケジュールについての懸念である。研究会が約2年、さらにそこで方針が決まったら具体的に検討する検討会が2年あり、そして予算要求をしていくという話であるが、非常に丁寧いろいろなことを考えて、しっかりした計画を立てて進めていこうという立場をとられようとしている。それに反対するものではなく、決して拙速であってはいけないと思うが、何しろ海の中の自然を再生する、また、利用していくというものは何が起こるか分からないということがあり、基本的に少しやってみて大丈夫かどうか確認をして、次の手を打つのが良いと思う。深浦でも実験を基に、それがあったからこそ次はどうしようかという話ができる。4年計画で、スタートしてみて、検討にこれだけ時間をかけたから後戻りできないというのでは困ってしまう。

もし、この部分は前倒しにできるということがあれば、その部分だけでも着手をするなど、4年検討してからということではないメニューの進め方を考えていただきたいと思う。

最後に、データの話が出てきたが、できるだけ昔から今までの広範囲のデータを集めていただくことがよいと思う。港湾計画でのデータという話も出たが、ピンポイントの細かいデータをたくさん集めるだけでなく、生態系アプローチを適用して、流域圏から東京湾、東京湾の湾口の外までを見据えて、広い目でデータを見ていただきたいと思う。

広い目で見るためのツールとして、海洋基本計画ができ、海洋データを一元的に提供していこうという流れの中で、海上保安庁のサイトに「海洋政策支援ツール」というサイトがある。既に日本全国をカバーしていて、どこに漁業権が設定されていて、どこに港湾区域が設定されているなど、また、簡単ではあるがどこに藻場・干潟があるなど、画面上で簡単にオーバーレイを見ることがで

きる。ここら辺りがスタートポイントになるかと思う。ただ、ここには、細かい底質、微地形、流れのデータなど、まだまだ入っていないものがあるので、そういうものを足していくということと、データばかりに目がいくと、自然の中のプロセスに目が行ってしまうが、そういうプロセスを人間が作り出していることを決して忘れずに、人間の影響に関してモデル化をしていく、どういう人がどういう働きをしているから環境が変わっているのだということを含めて、考えていただきたい。

概念モデルという、ある環境に対してなぜその環境が成立しているのかをみんなの知恵を持ち寄り、自然環境だけの話でなくて、社会環境の話、今までの歴史の話を詰め込んで説明するような手法がある。ぜひ、そういった手法の適用を考えて、いろいろな方が事業に参加できる下地を作って、進めていただきたいと思う。

【堀口委員】

最初に瑣末な質問ですが、18枚目のスライドで、アマモの移植を目指したが、底質調査の結果、現状の底質は好ましくないと書かれているが、具体的にどう意味か。

【事務局（港湾企画課 服部係長）】

今日は細かいデータを持ち得ていないが、現場のSS（浮遊物質量）や底質調査など何項目かを調査した結果、東京湾のアマモの育成上の環境基準ではないが、そういった指標に対して化学的に基準値を超えていたことと、浮泥層が50センチから1メートル近くあり、この浮泥層を撤去しないことには、この場所は人を呼び込むには厳しいということで、好ましくないとした。

【堀口委員】

海域を保全・再生するとはいろいろな観点があり得ると思うが、突き詰めると、私は生き物が戻ってくる、種類が豊富で量もたくさんいるというのが、昭和30年代の姿かもしれないが、それが究極の姿だと思っている。言い換えると、いくら水際へのアクセスがよくても、水しかなく生き物がいなければ、市民がどれだけたくさん来るのかと素朴な疑問がある。そういう点では、漁業者にとってもメリットがある、そういう姿を追い求めるべきではないかと思っている。

そのために何をしようか、できるか、という話であるが、これは非常に難しくなると思うが、流入負荷の削減、その他、環境省も国交省も努力をしているが、残念ながら結果として魚介類が、我々の恩師の清水誠先生の当時から、30年くらい前からの東京湾全域の底引きのデータを持っているが、それを見る限り、魚介類の質、種類数、量的な観点から見ると全然回復していない。底を這っている状態で、散々たる状況である。その状況をなんとか反転させたいと強く思っているが、それを考えると、相当大胆なことをやらないと難しいのではないかと。小手先の対応では難しいと思っている。各論で何をどこまでできるかはまさにこれからだが、決意みたいなのが必要で、究極の目標は生き物が増えること、そのためにはかなり大胆な発想で臨む必要があるのではないかとと思う。

同時に、あれもこれもと総論ではきれいな文章を書けるかもしれないが、実際問題としては、利害というか、あちらの人にメリットがあれば、こちらの人が迷惑ということがあると思うが、そういうときに、実際どこまで環境保全や生き物を増やそうとすることに基点を置くのか、これも最後は各論で必ず出てくると思うが、そういうところもこの研究会のどこかで明確にしておかないと、

総論の部分では皆さん賛成だが、各論では私の思っていることと話が違うというのでは、後でまとまらなくなり大変である。第1回の会合だから目指すものを高らかに掲げるのはよいが、その中でも優先順位をつけるということが、2回目か3回目か、どこかで必要になると思う。

【森委員】

環境ということをテーマにすると、定性的には分かるが、具体的にどういう課題があるのか分かりにくいところがある。港湾空港部においては、全国的にもそうだが、物流や防災を中心にやってきた中で、環境と比べると、物流であれば大型船が入れないとか、物流コストが非効率になっているとか、非常に分かりやすいことを所管している。

環境の場合、いくつか方針を出されてはいるが、藻を増やすのが目的なのか、賑わいを増やし市民を呼び込むことが目的なのか、課題を整理するのは難しいと思うが、実は、国交省の本省の中でも環境に関する目標設定は難しく、本省レベルでも頭を悩ませている。横須賀市の難しいところは対象地域が広いということだと思うが、それぞれの地区でどういう課題があるのかを、今日の配付資料のような形で見せてもらいたい。

進め方のところでは、スケジュールの辺りにもあったが、事務局の説明を聞いて、対象の地域がいくつかあり、平成26年度以降に1つの事業化をイメージしている中で、おそらくいくつか絞り込んでいくことが考えられていると思う。もちろん課題はそれぞれ見て行かないと分からないが、いくつか絞ってやっていこうということになるのであれば、どういうもの、どの地区を優先的にやっていくのか、また、2年間で6回やるというスケジュールであれば、今年度中には整備方針を固めながら、具体的に進めていかないといけないというイメージになっていくと思うので、各地区の具体的な課題を抽出しつつ、どこからどのように進めていくのかという、選定をするための方針のようなものを作っていただきたい。

古川委員からの意見にもあったが、スケジュールはもう少し柔軟に考えてもよいのではないかとと思う。最終的には長期的なことをやらなければならないので、その中での整備もあると思うが、例えば、リーディング的に短期的にやるようなところであれば、平成29年度事業着手というのはロングターム過ぎるところがあるので、切り取って早くできるような整備が可能であるのであれば、もう少し前倒しすることができるのではないかと。

【本多委員】

環境基本計画でも海の保全・再生というプロジェクトがあり、我々環境政策部自身の問題と考えている。そういった中で、今日の段階では、委員の皆さまの意見を聞いて次回以降に研究・検討を進めていくというのが正直なところである。

1つ申しあげておきたいのは、我々のところにもいろいろなデータがあるので活用していただきたい。

ここからは私の意見ということでお聞き願いたいですが、我々は海の再生ということで、今回の計画の中では、まずは東京湾で進めて行こうとしている。その方向性として、今日いただいている資料は一致している。

この研究会において、1つのターゲットに絞って行って最終的に整備までいくのか、それとも、

3つあるエリアの中を考えながら、いくつかのものを考えていく中で、効果や費用を考えると最終のターゲットとして1つ選ばれてくるというプロセスをとるので、出てくるお話も変わってくるのかと思う。

また、スケジュール面で、研究会を2年間続けていくというプロセスはじっくりやっていくということによいと思うが、併せて、研究会とは別の流れで、現場で何かやってみることもあってよいと思う。

【藤田委員】

国と県の今後の方針ということでお聞きしたい部分がある。実際に水産技術センターでは国総研と連携し、東京湾の浅海域再生という動きがあるとお聞きしているが、そういう中で、できるだけ同じ東京湾で同じ事業を考えているのであれば、ある程度、横須賀市としても同調させていただきたいと考えている。水産技術センターがどういう動きをされているのか、教えていただきたい。

【秋元委員】

国総研と水産技術センターと港湾局で、横須賀市の浅海域の生態系や漁業がどう変わってきたか、水域環境がどう変わったかをまとめていこうと考えている。

今週、国総研から受託を受けたので正式に動き出せる。漁業の変遷と水域環境の変遷となるが、3つの地区について全部の地区をカバーできる細かいデータは難しいと思っている。持っているデータを整理し、見える部分だけ、まとめられる部分だけをまとめていこうとしている。

【近藤委員長】

これからは、どなたでも結構です。指名しませんので、何か考えていることがありましたら、それぞれご発言ください。

【堀口委員】

確認というか質問であるが、再生、活生、共生と3つのエリアを示されているが、同時並行的にそれぞれやっていくという考えで臨むのか。それとも、その中でも優先順位をつけて、どこかのエリアを優先的・具体的に進めていくのか。

【事務局（港湾企画課 松尾課長）】

港湾環境計画の中では3つのエリアを設定しているが、計画自体は何年までに何をやるという計画にはなっていない。どこを優先的にやるかも特に決めていない。この計画自体は、できることをできるところからやりましょうという計画になっている。

今回の浅海域についても、事務局で候補地を示して、その中で研究・検討してくださいという形で進めようかとも思ったが、可能性としては横須賀港全部にあるということから始めたいと思い、いくつかの場所は参考として今日示したが、ここから選んでくださいということではない。

この会を進めていく中で、データのなもの、背景的なもの、また、地域性を考えた中で、どこがよいのかを研究・検討していきたい。今、ご意見をいただいた中では、整備と利活用、利活用の中

には水質や生態系も入ってくるかと思うが、整備をする場所を決めて、そこで何ができるかという考え方もあるし、一方で、横須賀港の中ではこういったものが必要、こういったことをしていけないといけない、そのためにはこういう整備をしていくべき、という考え方もあると思う。もちろん、両方を並行してという考え方もあると思っている。その辺りを検討していく進め方についても、いろいろなご意見があると思う。今日ご意見をいただいた中で、2回目以降に整理させていただき、こういう進め方がよいのではないかと、例えば、まずは利活用を先に考えた方がよい、又は、まずは生態系を考えて場所を絞り込んでいった方がよいということであれば、そういった視点での資料の整理をしていきたいと思っている。まずは、今日は制限なく何もなかったところから、事務局が示唆的に示さない形でやらせていただいている。そういった中でのご意見をいただきたい。

もう1点であるが、今日はパワーポイントでいくつかの場所を見ていただいたが、実際に見に行きたい、事務局に先進事例を見てきてほしい、こういった資料をそろえてほしいということがあれば、市の来年度予算に要求していくことも必要と思っている。今日はいろいろな意見をいただきたいということで、絞り込みをしないでお願いしているところであり、また、来年度、市民の意見を聞いた方がよいということであれば、その方法について事務局で検討させていただく。

また、先ほどからスケジュールの前倒しという意見もいただいているので、全部で4年と考えているが、もう少し早くできるものがあれば、調査もこういった調査をした方がよいという意見もいただきたい。ただ、次に活かせる調査でないと言予算も要求しづらい。本当は全体像がある中でこうした調査を行っていくというものがよいが、こういうところに繋がるという方向がはっきり出れば、順次調査や資料集めをしていきたいと思う。その辺りもご意見があればいただきたい。

【堀口委員】

個人的意見だが、究極については東京湾に生き物が帰ってくることが重要ではないかと思う。

そういう観点から言うと、横須賀市での今回の取り組みが、東京湾全体に何らかの形で波及していくのがよい。そういう意味で、何かケーススタディなど具体的な取り組みがあって、目に見えて生き物が帰ってきたとか、例えば、産卵場の保全・再生を試してみるというのがよいと思っている。

活生のエリアのどこかで、モデル地域を使ってある種の取り組みを行い、生物量の回復を推定し、効果を見てということがあってもよいのではないかと。

それと併せて、再生のエリアでも試行的に試せることはやっていくという考え方もあるが、それぞれ目指すものが、再生のエリアの追浜地区、本港地区、活生のエリアの走水地区など、どこまでよくしようという目標が違っている気がする。個々の底上げを図るのか、底上げを図りつつ特にここを突出してモデル地域としてトライアルなことを試験的に行い、上手くいけば周辺の自治体への波及効果を期待することを目指すのか、考える必要がある。

全体の底上げを図るのもよいが、1つのところで明確に生き物の回復を図るような具体的な手立てを講じるような進め方がよいと思う。

【今井委員】

自然を相手にすると当初の設計から大きく外れてしまうことがある。まさに、現地でやりながら絶えずPDCAの手法などにより、総括しながら修正し、次の段階へいくという方法にもっていくべき

だと思ふ。

その中で、ただ検討ばかりして実証的なものがないと、エネルギーというか、皆、飽きてしまう。その辺りは、進めつつ評価し、次のことをというところを、ある意味、実験的な要素があるかもしれないが、やはり、これだけ海が枯れてしまった状況の中では、そういうものを試みていくことが必要だと思ふ。もちろん、生態系は重要なので、その概念は共通認識として持ちつつ、具体的なものを早い段階で、皆の合意を得て、いろいろ試していくことを提案させていただきたい。

【近藤委員長】

委員も事務局も勉強しながら、お互いにやっていかないといけない課題であると思ふ。

いつになるか分からないが、一度、国交省が行った干潟のネットワークや浅場の再生など、こういう実証実験的なことが東京湾の中で既に行われているので、ご紹介させていただきたいと思ふ。どなたとは指名しにくいですが、自発的にこういう事例があるということで、30分位で2事例、2人の方にお話をいただければと思ふ。森委員、角委員、古川委員、堀口委員、どなたでも結構です。ぜひ、浅場の効果や干潟の効果など、実証実験を行った結果、こういう効果があったなど、お話いただければと思ふ。それは、おそらく、今後、ここで考えるうえでも非常に重要な要素となる。湾口部で出てきた覆砂材料で、東京湾でもいくつか行っているの、それは、比較的漁獲量を高める効果をもったり、漁民の方も、もう一度覆砂をしてほしいという希望を大きな声で言ったりということが出てきているので、そういう話もあればと思ふ。

斎藤委員にお願いしたいのは、横須賀の海域の東部の辺り全体で、こういうところでこういう魚礁があったらとか、あるいは、砂地で二枚貝が育ちそうな環境があり、そこを整備してくれるとちょっと漁獲量が増えるとか、あるいは、生き物が付着しやすい護岸がこうあればいいなど、ご希望も述べる必要があると思っている。決して科学的な根拠ではなく、経験と勘でのお話で構わない。先ほどの釣りの話ではないが、投げ釣りは困るが、落とし釣りはここならよいか、逆に、ここは取り締まってほしいなど、具体的にあればどんどんご意見をいただきたい。お話いただければ、この研究会でも基礎データとして有効に使えるのではないかと思ふ。

秋元委員、今井委員からは藻場の話がでたが、実際この辺りでどうなのか、データとして何かあるのか、あるいは、無ければ、その辺りを調査しなければいけないなどのご指導いただくと、今回の予算で組むのかは別として、今後の資料として、秋元委員から調査をやるかという話も出てくるかもしれないので、その辺りはご指導させていただきたいと思ふ。

もう一つ、皆さんにアドバイスをいただきたいのは、来年度も含めて、私たち委員よりも、若い事務局の方の勉強のために、全国レベルの事例の中で、上手くいっている、あるいは、困っているとか、ぜひこういう人に話を聞いてはどうかなど、そういうご指導をいただいて、見てきていただく。それをまたここで発表していただいて、委員の方とやり取りする。もしくは、ご専門の方をそういうところから呼んでくることもあり得ると思ふ。その辺りも考えていただければと思ふ。今回は、東北の津波災害とか東京湾の災害については考えず、あくまでも自然環境、自然再生で考えるという共通認識をもっていただきたい。そういう意味で、先進事例もご紹介いただきたい。

今日はあまり時間がないので、実際こういうところを見てきたらどうかとか、あるいは、実際のデータはないがこういう話で面白い話があるなど、事務局にメール等でお聞かせいただいても結構

です。

先進事例の視察といっても、委員全員ではお金がかかり無理だと思うので、事務局の方々が勉強しにいくということをご理解いただきたい。それから、アンケートの実施についても、市民の方を対象とするのかどうするのかということもあるので、アンケートについては時間をかけて、来年度でなくてもよいという気がする。多数決など数の論理でというような内容ではない。利活用とか、問題点を指摘していただくという面ではアンケートを行うことはよい。環境そのものについてアンケートを行うのは意味がないと思うので、その辺りは検討してもらいたい。

市内視察は、委員の皆さんは大変お忙しいと思うが時間をとってもらい、北から南まで1日かかると思いますので、いつやるのか調整をとっていただき、共通認識のもとに見た方がよいと思う。地元の方はよいが、市外の方は全てを見るのはなかなか難しいので、ぜひ、バスツアーとして行ってもらいたい。あるいは、海からのツアーでもよいが、難しいのは、米軍施設には入れないので、そこは別格になると思う。

【古川委員】

事業の進め方に関して、また情報提供したい。

堀口委員から、どこかに絞って検討した方がよいということがあったが、私も大賛成である。

その絞り方であるが、先ほど、再生、活生、共生のエリアという話が出ていたが、当面はそれぞれのエリアから可能であれば1カ所1事業を深く考えてみて、考えが詰まったらその中で場所を変えたり、または、方向性を変えたりすることもありで、最短で進められたらと思う。ただ、それだけであると横須賀市全体の長期的な計画とはならないので、並行して、全体を浅く広く眺めていただくような検討も含めて、進めていただければと思う。

いくつか絞るといところでいくと、目標なり問題点を明確にすることが大切ではないか。東京湾の環境の中で何が問題かというところが大切で、実は、「東京湾再生のための行動計画」が平成13年から24年度までの予定で動いている。この中では、9都県市を含め、国交省、環境省、水産庁が集まり知恵を出し合って、再生について考えている。

その中でも、貧酸素水塊が東京湾に広がっていて、それだけのためではないが、生き物が減っているということが問題視されてきている。その面から言うと、横浜市まで貧酸素水塊が広がっているが、横須賀市は少し貧酸素の分布が観測される時もあるが、比較的よい状態である。

「東京湾再生のための行動計画」の目標として、貧酸素がなくなったらどんな環境ができるのかを示す例となる。溶存酸素が豊富にあるようにすることは、非常に時間がかかる事業であり、地道にこれから先、30年、50年かけてやって行かなければならない。その頑張り続けるために、これを頑張り通したらこんなによいことになるのだということを横須賀の地から発信していただくことが、周りの人の励みになるし、具体的な目標になる。

その時に、貧酸素がなくなるということだけではなく、貧酸素がなくなったら何が起こるのか、アマモも1つのとてもよい指標になる。貧酸素の影響が再生のエリアで一部、泥っぽくなりアマモが育たなかったのも貧酸素の影響があったのではないかと感じている。ここで問題がクリアでき、アマモが再生されるようであれば、その仕事をもっと北の方、東京湾の奥にまで適用されていくと思う。

もう1つ、貧酸素以外に重要なことは、「東京湾再生のための行動計画」の中でモニタリングを定期的に行っている。貧酸素が広がっているが、どこが再生のポイントとなるか、データを見てワークショップを行った。その結果、改めて確認したことは、海と陸とが繋がっているような浅瀬、浅場、川の河口といったような、陸と海が接しているような場所が環境に対しても緩衝領域になっていて、貧酸素からの回復を早めているし、生き物が生き残っている。そういう陸と海の境界ということであれば、まぎれもなく、活生のエリアに少しずつ残っている自然海岸というのは、そういうことを確かめ、成果を見ていく鍵になるのではないかと。

ターゲットや考え方を絞ったポイントで、リーディングプロジェクトのようなものを1、2カ所に絞って、集中的に意見交換をして、そのうえで全体的なことを理解したい。

【近藤委員長】

皆さまからは貴重なご意見をいただきました。事務局には、本日の意見を取りまとめ、次回の研究会に向けての作業をお願いしたい。委員の皆さまには、他に思いついた点があったら遠慮なく事務局にご連絡いただきたい。

本日の議題としては以上です。忌憚のないご意見をいただき、ありがとうございました。

「その他」ということですが、事務局から何かありますか。

【事務局（港湾企画課 松尾課長）】

整理をさせていただくと、次回に向けて私どもの方で、

- ①生態系、水質、変遷等のデータの収集と整理
- ②課題の整理
- ③目標というか定量的に図れるような指標
- ④それを基にしたモデル的な事業のたたき台

について、整理させていただきたい。次回までに出せるか約束はできないが、その方向で進めたい。その間で、事務局がどこか見に行けるところがあれば行ってみたいと考えている。その後、

- ⑤委員の現場視察

- ⑥4年間のスケジュールの整理

をさせていただきたい。なお、本日言い足りない、言っておけばよかったということやご意見等があれば、8月3日までにメール等でいただきたい。その後もご意見は受け付けるが、整理をさせていただく都合上、8月3日を期限としたい。

【近藤委員長】

私からのお願いです。この会議は、委員会ではなく研究会なので、今後、お互いに勉強し合っていくということで、どなたか毎回30分位プレゼンテーションをしていただいて、それに対して、皆さんからご意見や質問をしていくことをしていきたい。横須賀の事例に変えるならどうなるのかということで、質疑応答をやっていくような、研究会形式でやっていくことを提案したい。

どちらかというと、特に、研究者の方に自分の経験を踏まえて、課題に対してこういうプレゼンがあると、スライドなどを用いて発表していただいて、それに対して質疑応答、あるいは、横須賀

に例えたら何をしたらよいかをやっていった方が身に付くのではいか。

【今井委員】

堀口委員から先ほどのご発言にもあったが、堀口委員は長年の東京湾の生き物の変遷について調査しているので、先ほどのお話の「何で」というところの、貧酸素につながると思うが、概要を話していただけると、ターゲットが、今日の皆さんの発言の裏付けとなり、共通認識になるのではないかな。

古川委員にも、世界的、全国的にもたくさんの前例もお持ちで、モニタリングの取りまとめをされていることから、横須賀の位置付けなど具体的に示していただくと、また、今日のご発言を裏付けるようなことを話していただくと、分かりやすいのではないかなと思う。

【近藤委員長】

では、堀口委員と古川委員にそれぞれ 30 分ずつプレゼンしていただき、その後、30 分ずつ質疑応答をして、皆さんからご意見・ご質問をいただく方法でどうか。

これには事務局も入っていただき、考えていることで何か分からないことがあれば聞いていただくことにしたいが、どうか。

【各委員】

はい（賛成）。

【事務局】

はい（了解）。

【近藤委員長】

それでは、以上をもちまして、第 1 回横須賀港浅海域保全・再生研究会を終了いたします。
委員の皆さま、ありがとうございました。